

●基本をおさらい

# PISA型「読解力」 3つのポイント

## ①「PISA」って何？

OECD（経済協力開発機構）が実施する「生徒の学習到達度調査（Programme for International Student Assessment）」のことです。頭文字をとって「ピサ」または「ピザ」と呼ばれます。義務教育修了段階の15歳児を対象に、2000年から3年ごとに実施されています。2006年の調査には57の国や地域から40万人が参加しました。

PISAでは、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」を主要3分野として調査します。つまり、PISA型「読解力」とは、PISAの「読解力」分野で求められる力を意味しています。

なお、この調査の目的は、義務教育で身に付けた知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度「活用」できるかを評価することにあります。

# PISA型 「読解力」



イラスト | タムラサリ

## ②なぜPISAが注目されるようになったの？

日本は2003年の調査で、「読解力」分野の得点がOECD平均程度まで低下し、順位も2000年の8位から14位にまで下がるなど、課題が示されました。

この結果を受けて文部科学省が作成したのが、2005年12月の「読解力向上プログラム」です。プログラムの中では、PISA型「読解力」を高めていくための具体的な施策や指導のあり方が提言されており、特に今後の戦略として「学習指導要領の見直し」や「全国学力調査の活用・改善」などが挙げられ、今後の学校教育にPISA型「読解力」の考え方が深く影響してくること示されました。

## ③PISA型「読解力」は、従来の「読解力」とどう違うの？

PISAでは、「読解力」を次のように定義しています。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

このため、PISAの「読解力」の問題では、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の3つの観点を設定しています。

(3~4ページで詳しく解説しています。)

また、「テキスト」には、文学的文章や説明的文章などだけでなく、図やグラフ、表なども含まれます。

従来の「読解力」という語が、主に文章から情報を取り出して解釈することを主眼としているのに対し、PISA型「読解力」では、テキストの対象が文章や図、グラフなど多様であること、読み取ったことからさらに考えを深めたり（思考力）、評価したりすること（判断力）までを含んでいるのが、大きな特徴と言えます。

### ★「表現力」も欠かせないポイント

PISAの調査では、出題の約4割を自由記述形式が占めています。日本は自由記述問題の無答率が特に高いという結果が出ました。これを受けて読解力向上プログラムでは、「PISA型『読解力』の課題が『読む力』にとどまらず、『書く力』や、特に『考える力』と関連していることを示唆している」、「『考える力』を中核として、『読む力』『書く力』を総合的に高めていくことが重要である」として、「各学校で求められる改善の具体的な方向」について、3つの重点目標を掲げています。

- ◎ テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実
- ◎ テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実
- ◎ 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

現在、各地の小学校でPISA型「読解力」の研究が広まりつつあります。しかし、PISA型「読解力」とは、実際どのような力を意味するのでしょうか。次の学習指導要領のキーワードにもなっている「思考力」「判断力」「表現力」などとは、関係があるのでしょうか？ まずは、PISA型「読解力」の基本に立ち返って、考えてみましょう。次のページでは、各地の研究校で指導に当たられている広島大学大学院教授・角屋重樹先生に、PISA型「読解力」を育成する学習指導について解説をしていただきます。また後半では、日常の学習指導にすぐに取り入れられる、実践校の取り組みや指導の工夫をご紹介します。



つまり、情報の読み取り、解釈、熟考・評価に加えて、熟考したことを「表現する」力も重要視されているのです。

2007年4月に実施された文部科学省「全国学力・学習状況調査」の「B（活用）問題」でも、自由記述問題が多く盛り込まれていました。「表現力」は、今後ますます重視されそうです。

← 次のページは、角屋重樹先生の解説です。

はじめに

「PISA型「読解力」を育成する学習指導」という今回のテーマは、現在、話題になってきているPISA型「読解力」を育成するための学習指導のあり方を探ろうとするものである。PISA型「読解力」を育成する学習指導の在り方を追究するために、まず、PISA型「読解力」とはどのような力なのか、次にPISA型「読解力」がなぜ必要とされるのか、そして、PISA型「読解力」を育成する学習指導を、それぞれ明らかにし、PISA型「読解力」を育成する学習指導の構成視点を抽出することとする。

### I PISA型「読解力」とはどのような力か

PISA型「読解力」とは、次の3つの力から構成されている。

- A** 情報の取り出し：テキストの中の情報を取り出す力
- B** 解釈：書かれた情報から推論して意味を理解する力
- C** 熟考・評価：書かれた情報を自らの知識や経験に位置づける力

この「読解力」は情報を処理したり、問題を解決していく力でもあるといえる。

# PISA型「読解力」を育成する学習指導

文●角屋重樹

### II なぜ、PISA型「読解力」か

なぜ、PISA型「読解力」が必要とされるのかを検討するために、「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」を調べると、以下のことが記述されている。

「5. 学習指導要領改訂の基本的な考

え方」という節において、「(4) 思考力・判断力・表現力等の育成」という項目がある。この項目の第1段落において、「3. で示した子どもの学力に関する各種の調査の結果は、いずれも知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等に課題があることを示している」と記されている。

また、第2段落において、「現在の各教科の内容、PISA調査の読解力や数学的リテラシー、科学的リテラシーの評価の枠組みなどを参考にしつつ、…(中略)…知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむための学習活動について、次のような分類を試みた」と記述されている。その分類は次のものである。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

これらのそれぞれを、前項の「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という力と対応させると、表①のようになると考えられる。

つまり、①～⑥は、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という3種の力に

においてそれぞれの重みをかけたものといえる。したがって、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」という3種の力の育成は、思考力・判断力・表現力等の育成につながるといえる。

<表①>

思考力・判断力・表現力を育むための学習活動	A 情報の取り出し	B 解釈	C 熟考・評価
① 体験から感じ取ったことを表現する	●		●
② 事実を正確に理解し伝達する		●	●
③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする		●	●
④ 情報を分析・評価し、論述する			●
⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する	●	●	●
⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる		●	●



### III PISA型「読解力」を育成する学習指導

A情報の取り出し、B解釈、C熟考・評価というPISA型「読解力」は、前述したように、情報を処理したり、あるいは問題を解決していく力であるといえる。ここで、PISA型「読解力」と問題解決過程との関係について考えてみよう。

#### (1) PISA型「読解力」と問題解決過程

前述のA～Cのそれぞれは、問題解決の各過程と次のような対応関係にあると考える。問題解決活動は、子どもが文章や映像、図表、現象等に働きかけ、問題を見いだすことから始まる。文章や映像、図表、現象等から問題を見いだすことが、情報の取り出しに対応する。次に、子どもは問題を解決するために、原因や要因である見通しを発想し、その見通しの真偽を検討するために、解決方法を立案し、実行する。見通しの発想、解決方法の立案、実行は、解釈に対応する。そして、子どもは実行した結果を見通しや解決方法との関係で検討する。このことが、熟考・評価に対応する。

- ① 文章や映像、図表、現象等から問題を見いだす：A情報の取り出し
- ② 問題を解決するための見通しの発想、解決方法の立案、実行：B解釈
- ③ 解決方法の結果を見通しや解決方法との関係で検討：C熟考・評価

そこで、①～③あるいは、A～Cのそれぞれの力を育成する工夫を、以下に考えよう。

#### (2) PISA型「読解力」を育成する工夫

①問題を見いだす力の育成  
問題を見いだすためには、まず、子どもが直面している文章や映像、図表、現象等について、現象どうし、あるいは現象と既有的知識との間に見いだすことが必要になる。例えば、自然現象を例にすると、枯れた植物と枯れていない植物を観察し、両者の違いに気づくことである。このような違いを見いだすことから、子どもは現象の違いがどのような原因(要因)によって生じたのかを考えるとようになる。

ところで、現象の違いに気づくためには、比較の基準が必要で、その基準となるものと現象とを比べる力が大切になる。また、比較するという場合、「何と何を」比べているのが不明確なことが多い。このため、比較の視点と対象が明確になるように指導することも大切なことである。

以上のことから、情報の取り出しとしての問題を見いだす力を育成するためには、直面している現象や現象どうし、あるいは、現象と既有的知識との間の違いに気づく力を育成することが大切といえる。

②見通しを発想し、解決方法を立案、実行する力の育成  
見通しを発想するため、子どもが、生

起している現象と既有的知識とを関係づけ、その現象が生じる原因(要因)を考え出すことになる。したがって、解釈する力として、問題解決のための見通しを発想する力を育成するためには、現象と既有的知識を関係づけ、現象が生じる原因(要因)を発想できることが大切といえる。

また、熟考・評価するために、実行結果を見通しや解決方法で検討するので、見通しを図や表を用いて表示する力を育成することも重要になる。

#### ③ 実行結果を、見通しや解決方法との関係で検討する力の育成

実行した結果を、見通しや解決方法との関係で検討するためには、まず、言語や図、表で表示した見通しと解決方法の実行結果を比べる。このような比較により、子どもは見通しや解決方法を評価できるようになる。

### IV PISA型「読解力」を育成する学習指導の構成視点

今まで述べてきたことから、PISA型「読解力」を育成する学習指導の構成視点として、以下の3点を列挙できる。

- ① 情報を取り出す力を育成する。具体的には、問題解決活動において問題を見いだす力を育成するため、直面する現象について現象どうし、あるいは、現象と既有的知識との間の違いに気づく力を育成する。
- ② 解釈する力を育成する。具体的には、

問題解決活動において問題解決のための見通しを発想する力である、現象と既有的知識を関係づけたり、現象が生じる要因あるいは原因を発想する力を育成する。

③ 熟考・評価する力を育成する。具体的には、問題解決活動において実行した結果を、見通しや解決方法との関係で検討する力を育成する。

#### ●参考文献

- (1) 文部科学省、読解力向上に関する指導資料「PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向」(平成17年12月)
- (2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」(平成19年11月7日)

#### 角屋重樹 先生 プロフィール



かどや・しげき ●1949年三重県生まれ。広島大学大学院教育学研究科教科教育学(理科教育)専攻博士課程単位取得退学。博士(教育学)。広島大学大学院教育学研究科教授。宮崎大学教育学部助教授、文部省初等中等教育局教科調査官等を経て2001年より現職。主な著書：『子供を理科好きにする授業入門』(小学館)、『これからの教育のデザインと評価』(教育出版)他多数。

次のページでは、  
授業への  
取り入れ方を  
ご紹介します！



# 国語

広島県 東広島市立西条小学校  
北村由美子 先生

本校では、「テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取り組み」として、次のような実践をしています。

●多様なテキストから  
知識や情報を整理する

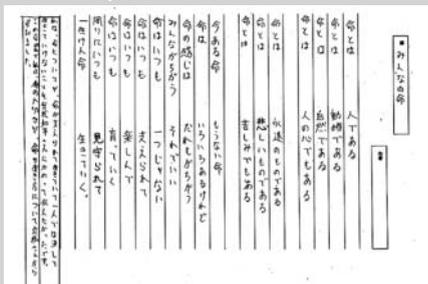
例えば、立松和平著『海のいのち』を題材にした授業では、立松氏の6つの作品を読み比べて、作品に書かれている「いのち」について、関連図を作成しました。

さらに、関連図に整理した自分の考えをもとに、作者の「いのち」に対する思いを全体交流し、考えを深めました。交流の際には、叙述をもとに「なぜそのように考えたのか」「自分の考えはこれか」「いのち」を検討させます。交流を通して「いのち」についてのキーワードが導き出され、自分の考えが深まりました。

●学習前の「いのち」のとらえ



●学習後の「いのち」のとらえ



↑詩に込めた「自分の思い」を書き添えさせます。

●知識や情報を活用して  
自分の考えをまとめる

交流したことをもとに、「いのち」に対する自分の思いを詩でまとめる活動につなげました。また、学習の前と後の「いのち」に対する思いの変容を知るために、最後に「自分の思い」を書き添えました。児童の詩には「命とは永遠のもの」「悲しいもの」「苦しみでもある」「支えられて」「見守られて」という言葉が綴られ、自分で読み取ったことや全体交流によって感じたことを詩の中に表現することができていました。



# 授業の工夫

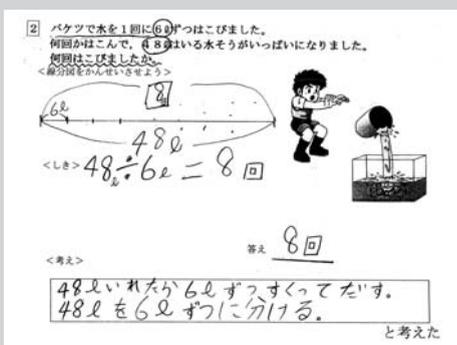
# 算数

広島県 世羅町立伊尾小学校  
上田早地子 先生

本校では、PISA型「読解力」の各段階（情報の取り出し→解釈→熟考→評価・活用）を、従来の問題解決過程（課題把握→自力解決→集団解決→まとめ）の流れに対応させ、次の2点を重視した取り組みを行っています。

●自力解決（解釈）時：書く活動の工夫で自分の考えを持たせる

問題を解く際、式と答えだけを書くのではなく、自分の考えを絵や表、図などを使って言葉で書き表す場を設定しています。なぜそのような立式をしたのか、その式



で何を表すことができるのか、言葉で書き表します。そうすることで、問題文から関係を読み取り、式はその関係を表したものであることを理解できるようになっています。答えが合っていれば良いのではなく、答えにたどり着くまでの思考の過程を重視するのです。

●集団解決（熟考）時：話型を使って互いの考えを練り合い深める

自分の考えが持てたら、互いにどういう考えで解決したのか意見交流し、より良い解決方法を見つけてみます。しかし、どのように言えばよいかわからないという児童には、話型を提示しそれに沿って発言させるようにします。基本的な話型は「私は○○だと思います。理由は…です」という判断と根拠のパターンですが、場面によって児童に使わせたい表現方法を提示します。発言を苦手とする児童にとっては、話型に合わせて自分の考えを発表できるので、発言に対する抵抗感は少なくなるようです。



# 理科

東京都千代田区立九段小学校  
福田章人 先生

PISA型「読解力」の3つの側面(①情報の取り出し、②解釈、③熟考・評価)は、理科の授業で考えてみると、問題解決の過程と考えることができます。そこで本校では、「①事象から問題を見いだす、②解決の見通しをもった仮説を立てて、その仮説を検証する方法を計画し、実験等で検証する、③予想した結果と実際に実験等をした結果を対比しながら問題の結論を導出する」という一連の問題解決的な学習活動をしていくことが、PISA型「読解力」の育成につながると思っています。

そのためには、論理的な思考力が必要です。そこで、どの先生でも問題解決的な授業を行い、子どもも論理的な思考力を育てていくように、次の2つのことに取り組んでいます。

## ●教師の発問等の定型化を図る

発問を定型化し、何度も繰り返していくことで、教師は問題解決の活動を構築しやすくなり、子どもは問題解決をしていくための論理的な思考パターンを身につける



↑「予想どおり、葉が青むらさき色になった。このことから、…」という型にそってカードを記入させます。

ことができるようになると思っています。具体的には、2つの事象を提示しながら、「どこが違うか」「違いが起きた原因は何だと考えられますか」と問いかけ、子ども自らの問題づくりへと進めるような発問等を使っています。

## ●子どもに言語技術を身につけさせる

「考えを先に述べ、必ず理由も述べる」「主述をはっきりさせる。呼応させる」等の言語技術も重視しています。これらは論理的な表現であり、論理的に思考したり説明したりするためには欠かせません。そこで、繰り返し言語技術の指導を積み上げていきます。

# 明日からできる

# 社会

京都府京都市立翔鸞小学校  
高宮佳彦 先生

社会科の学習では、文章やグラフ・写真・地図など多様な資料を活用しながら学習を進めていきます。そういう意味からも、連続型・非連続型テキストの両方が資料として提示されている教科です。

この教科の代名詞となっている問題解決的な学習は、「思考の連続」です。思考とは、通常は論理によって成り立っています。その際、何について考えるのか(目標)、どのような事実から考えるのか(学習材)、どのようにして考えるのか(考え方)、どのようにして伝えるのか(表し方)を明確にする必要があります。

## ●論理的に考える

ひとつの結論を導き出すためには複数の根拠が必要です。複数の根拠を関連付けながら、いくつもの結論を想定し、更にその中から最も論理にかなったひとつを選択することが好ましいといえます。その中で意外に指導しきれないのは、「考え方」の指導です。比較する・関連づけるなどという方法や、分類するなどの方法を、

日常的に指導していくことが必要です。また「例えば」「つまり」と言う言葉を使って、複数の事例を挙げた実からわかり得たことをまとめた」ということも考えられます。



## ●論理的に表現する

表現活動において、クラス内だけで通用するような言い回しや曖昧な表現を、聞き手が勝手に補足して理解してはいないでしょうか。論理的に表現するということは、話の骨子を組み立てるとともに、曖昧な表現を避けるということとです。例えば「この工場は、とても広い」という表現ではなく、何と比べて広いのか、具体的な数値ではいくらなのかを明らかにさせます。

PISA型「読解力」の指導は、新しい学力観ではなく、指導改善ととらえたいものです。